

野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

ジャノヒゲ *Ophiopogon japonicus* (Thunb.) Ker Gawl.
(ユリ科 Liliaceae)

[APG 分類体系: キジカクシ科 (クサスギカズラ科) Asparagaceae]

暑かった夏が過ぎ、ようやく秋らしくなる頃、山裾の道端を歩いていると、緑色をした細長い葉の陰で穂につけたいくつもの小さな青い玉を見つけることがあります。これがジャノヒゲです。ジャノヒゲは別名をリュウノヒゲともいい、秋から冬にかけて果実のような青い玉をつけています。私の故郷、兵庫県の但馬地方では、この青い玉を「ほろほろ玉」といい、子供の頃、ヤダケ(シノベタケ) *Pseudosasa japonica* で作った「ほろほろ鉄砲」の弾にして遊んでいました。当時は何故、ほろほろ玉というのかは、考えもしませんでした。今になって思えば、「ほろ」とは、母衣ほろの意で、昔の武将が戦の折、背中に背負っていた袋に似ているからでないかと思っています。本植物は日本



写真1 ジャノヒゲ (花)

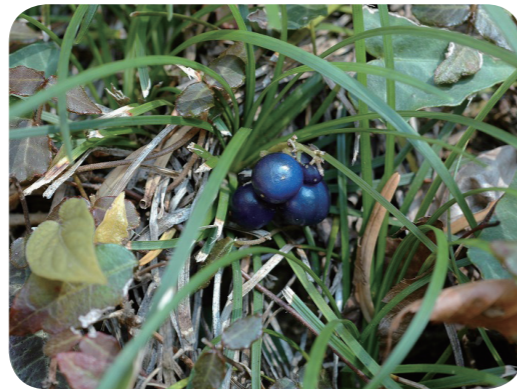


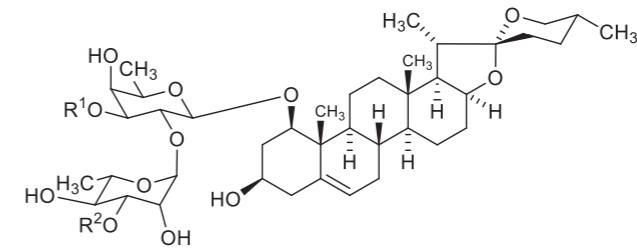
写真2 ジャノヒゲ (種子)



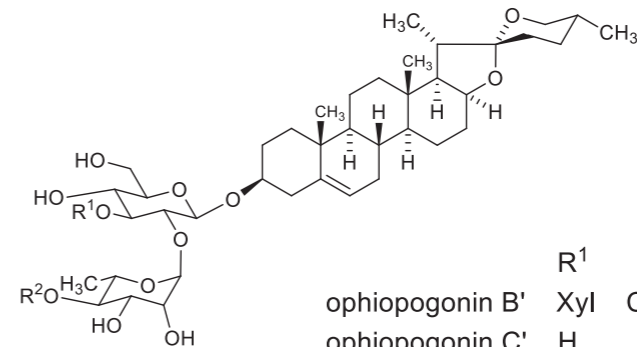
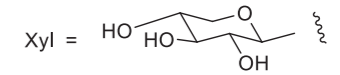
写真3 ジャノヒゲ (根と葉下部)



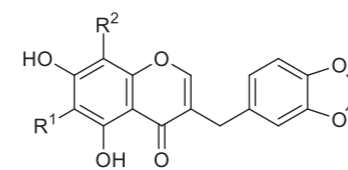
写真4 ヤブラン (花)



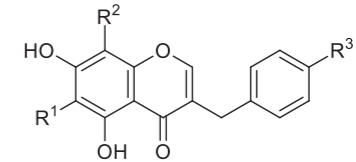
	R ¹	R ²
ophiopogonin A	H	COCH ₃
ophiopogonin B	H	H
ophiopogonin C	monoacetate	
ophiopogonin D	Xyl	H



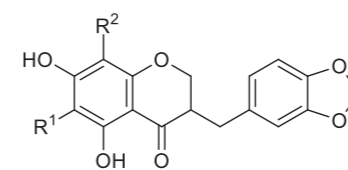
	R ¹	R ²
ophiopogonin B'	Xyl	COCH ₃
ophiopogonin C'	H	H
ophiopogonin D'	Xyl	H



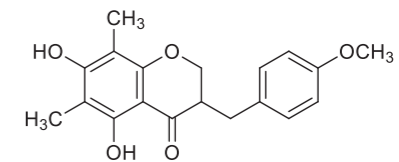
	R ¹	R ²
ophiopogonone A	CH ₃	H
methylphiopogonone A	CH ₃	CH ₃



	R ¹	R ²	R ³
ophiopogonone B	CH ₃	H	OCH ₃
methylphiopogonone B	CH ₃	CH ₃	OCH ₃



	R ¹	R ²
ophiopogonanone A	CH ₃	H
methylphiopogonanone A	CH ₃	CH ₃



methylphiopogonanone B

図1 成分の構造式



写真5 生薬：バクモンドウ（麦門冬）

を含む東アジアからフィリピンの森林に広く分布する高さ 10 cm ほどの多年生草本で、夏に総状花序に淡紫色の小さい花をつけ、子房は種子を 1 個含みますが、半下位で成熟前に破れて種子が露出し、青く熟します。葉の形から、ジャノヒゲ^(じや ひげ)またはリュウノヒゲ（竜の鬚）と名付けられたそうですが、ジョウノヒゲ「尉（じょう）の鬚」が転訛して、ジャノヒゲになったとする説もあります。ジョウノヒゲとは、能面で老人の面を「尉（じょう）」といい、本植物の葉をその能面の鬚（ひげ）に見立てたそうです。そういえば、蛇の髭は見たことがありま

せんし、竜は空想上の動物でもあります。

本植物の根の膨大部はバクモンドウ（麦門冬, *Ophiopogon Radix*）といい、止渴、強壯、鎮咳、去痰、鎮静などを目標に、^{ばくもんどうとう}麦門冬湯、^{ちくじょうたんどう}竹茹温胆湯、^{せいしんれんしん}清心蓮子飲、^{せいはいとう}清肺湯、^{ちやうとうさん}釣藤散、^{はんげこうぼくとう}半夏厚朴湯などに使われます。成分としては、ステロイドサポニンの ophiopogonin A, B, B', C, C', D, D' など、ホモイソフラボノイドの ophiopogonone A, B, methylophiopogonone A, B, ophiopogonanone A, methylophiopogonanone A, B など、他にオリゴサッカライド類が報告されています。また、茎は食用とされ、高知県などでは湯がいてから油揚げなどと一緒に煮て食されるそうです。また、本植物は近年、土砂崩れ防止のため、植え込みにもよく用いられています。似た植物にヤブラン *Liliope muscari* があり、こちらは子房上位で種子は緑黒色、葉も少し幅のある線状被針形です。なお、ジャノヒゲ属やヤブラン属は、新しい APG 植物分類体系^{注1)}ではキジカクシ科（クサスギカズラ科）に移されています。

連絡先：白瀧 義明

城西大学薬学部生薬学教室 shiratak@josai.ac.jp

注 1) APG 植物分類体系：1998 年、APG (Angiosperm Phylogeny Group; M.W. Chase ら) によって発表された葉緑体 DNA や核 DNA の遺伝子情報に基づいた新しい分類体系。2003 年に改訂版 “APG II ”, 2009 年に “APG III ”, 2016 年には “APG IV ” が出されている